

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13189

研究課題名(和文)なぜ、「彼に会えば電話して下さい」は変なのか？ 通時的観点からのアプローチ

研究課題名(英文) Why does 'Kare ni aeiba denwa shite kudasai' sound strange?-an approach from diachronic perspective

研究代表者

瀬戸 義隆 (Seto, Yoshitaka)

大阪大学・マルチリンガル教育センター・特任助教(常勤)

研究者番号：00826159

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代日本語におけるバ命令条件構文の使用制約が存在する要因について共時的および通時的な観点から考察した。その結果、意味的に類似したタラ命令条件構文とバ命令条件構文が従属節で提示される非状態的な条件を提示するにあたっての曖昧性を回避するためには、元来、完了的な意味を表す助動詞のタリを含むタラ命令条件構文が好まれ、その結果、状態的な条件を提示する場合にはバ命令条件構文、非状態的な条件はタラ命令条件構文で表す機能的な棲み分けが生じたことを提案した。その結果として、「彼に会えば電話して下さい」のように非状態条件を示すバ命令条件構文は現代日本語において容認性が低くなることを本研究のまとめとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、現代日本語における主要な命令条件構文であるバ命令条件構文として用いられる語彙と、主節で依頼を示すために命令形で示される特徴的な語彙とそれらの意味を具体的に記述するとともに、そのような従属節で示される語彙・意味的な分布は、他の関連する条件構文と、それらの構文スキーマの変遷によって通時的に形成されたという観点から提案しており、言語の振る舞いが歴史的な言語の変化によって形成されることを具体的に示した点において学術的意義が見られる。また、現代日本語のバ命令条件構文とタラ命令条件構文における特徴的な語彙が記述されたため、その結果を両構文の使い分けに関する教育に応用する可能性も考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study examined the factors behind the usage constraints of BA imperative conditional constructions in Modern Japanese from both synchronic and diachronic perspectives. The findings suggest that in order to avoid ambiguity when presenting non-stative conditions in subordinate clauses, the TARA imperative conditional construction, which originally included the auxiliary verb TARI to express a perfective meaning, was preferred over the BA imperative conditional construction. Consequently, a functional differentiation emerged where the BA imperative conditional construction is used for stative conditions and the TARA imperative conditional construction for non-stative conditions. As a result, BA imperative conditional constructions indicating non-stative conditions, such as "Kare-ni ae-ba denwa-shi-te-kudasai." (Please call if you meet him), are less acceptable in Modern Japanese.

研究分野：認知言語学 コーパス言語学

キーワード：バ条件文 タラ条件文 認知言語学 コーパス言語学

## 1. 研究開始当初の背景

現代日本語において、接続助詞の「バ」が従属節と主節を接続する条件文では、主節に命令形の述語が生じると従属節の述語として動作性の述語を用いることができない(国立国語研究所1964)。この特徴は主節で発話者の認識を表すような条件文の場合には見られない。また、「バ」と交替して使用することが往々にして可能な接続助詞の「タラ」を用いる場合にも、このような制約は存在しない。

この振る舞いが見られる要因としては、従属節で表される事態の制御可能性(山下1991)や従属節で表現される事態の仮定性(浜崎1999)などの意味的性質が関連しているという考察がされてきたが、それだけでは説明出来ない用例も多く存在する。この振る舞いを説明するには三つの問いに答える必要がある。すなわち、(1) 接続助詞の「バ」、(2) 動作性の従属節述語、(3) 主節述語が命令形で表されるといった各々の性質が、どのように容認性の低下に寄与しているのか、という問いである。(1)(2)に関しては接続助詞の「タラ」と「バ」の競合に伴う「バ」を含む条件文の頻度低下(瀬戸2015; 2016)、(3)については従属節述語の活用形式が未然形から仮定形へと移行したことによる条件文の意味変化(瀬戸2018)という要因が関連することを示してきた。しかし、これらの変化にあたって、どの時期に、また、どのような用例に変化が起こり、現代日本語に見られる特徴が形成されたかという点については、明らかになっていない部分が多い。

上記3点の問いに対する具体的な変化に関わる要因と、その変化のプロセスを具体的に明らかにすることで、日本語の条件文の体系変化と、現代日本語における条件文の体系で「バ」「タラ」「ナラ」「ト」のような接続標識の機能的分担の構成について理解を深めることが可能であるという観点から研究を開始した。

## 2. 研究の目的

本研究では、現代日本語の条件構文において、接続助詞「バ」が使用され、その主節述語が命令形で表現される条件文を「バ条件命令構文」と呼び、タラを接続標識として用いた主節述語が命令形で表現される条件文を「タラ条件命令構文」と呼ぶ。バ条件命令構文では、従属節の述語として動作性の述語が使用できないという制約が指摘されてきたが、本研究では、この制約に関わる通時的な形成過程を解明するために、(1) バ条件命令構文とタラ命令条件構文の従属節述語の異なり語数の変化、(2) 現代日本語における条件的意味を表現するにあたって、従属節述語を仮定形(已然形)と「バ」の複合形式で表す場合に、主節述語が命令形述語を含むようになった過程を検討することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究の考察対象であるバ命令条件構文に前接する語彙は未然形接続から已然形接続への形式変化を経験していることから、用例の収集においては、それらの活用形を含むバ命令条件構文をそれぞれ、「日本語歴史コーパス」(CHJ)と「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)から収集した。また、同様にタラ命令条件構文に相当する用例も同コーパスから収集した。

まず、現代日本語におけるバ命令条件構文の制約形成の過程を検討するには、まず、当該構文の振る舞いを詳細に検討する必要性を踏まえて、BCCWJから収集した用例について前件述語と後件述語として出現する語彙と、それらの意味的な特徴を検討した。現代日本語のタラ命令条件構文についても同様の方法で検討を行った。

続いて現代日本語以前の用例については、特に現代日本語におけるバ命令条件構文の前件述語の振る舞いが形成される過程を検討するために、バ命令条件構文の前件述語が未然形をとるものと已然形をとるものをそれぞれ、バ未然命令条件構文、バ已然命令条件構文として位置づけるとともに、現代日本語において類似した機能を示すタラ命令条件構文も考察対象とした上で、それらの前件述語の分布について検討を試みた。また、バ未然命令条件構文とタラ命令条件構文の前件述語に生起する語彙の性質が変化した時期を特定するために Variability-based neighboring clustering (VNC) (Gries and Hilpert 2008) を採用し、これを踏まえて、それぞれの構文における変化について検討を行った。

上記のバ命令条件構文の振る舞いに関する分析を踏まえて、構文文法 (Construction Grammar) の枠組みから検討を行い、バ命令条件構文の構文ネットワークの構成についても検討を行った。

## 4. 研究成果

命令条件構文については、以下の項目について事例研究を実施し、命令条件構文の振る舞いについて新しい知見を得ることが出来た。

### (1) 現代日本語におけるバおよびタラ命令条件構文の特徴的語彙・意味

現代日本語のバ命令条件構文の前件では「完了」「肯定的性質」「存在」「否定」「能力」、後件では「物体の操作」「コミュニケーション」「接着/脱着」「知覚・認知」に関する丁寧な依頼が示さ

れることが中心的であることが示された。この結果は、従来の先行研究の指摘に見られるようにバ命令条件構文については状態に関わる条件が中心的であることを支持する一方で、必ずしも、状態という意味に要約することが出来るわけではないことも同時に示している。また、タラ命令条件構文では、「感情」「肯定的性質」「移動」「知覚」「到達」「存在」「ポライトネス」「過程」に関わる条件、後件では「停止」「コミュニケーション」「認知的活動」「知覚」「接着」「授受」「一般的動作使役」「ポライトネス」「移動」に関わる依頼が表現されることが示された。また、バ・タラ命令条件構文は互いに類似した意味を示す一方で、それぞれ、前件と後件に出現する具体的な語彙については独自の特徴があり、構文として独自の性質を持つことが示された。

#### (2) バ未然命令条件構文とタラ命令条件構文の変化

バ未然命令条件構文およびタラ命令条件構文の前件に出現する語彙に対する VNC はいずれも 1800 年代前半を境として変化が生じたことを示唆する結果を示しており、バ未然命令条件構文では前件に出現する新規語彙が減少したのに対して、タラ命令条件構文の前件では新規語彙が減少したものの、その後増加したという点で、2つの構文には対照的な違いが見られた。このことはバ未然命令条件構文の構文スキーマが新しい用例を認可する力を失いつつあった一方で、タラ命令条件構文の構文スキーマの影響力は強く、新規的用例を認可する力を維持していたことを示している。また、このような状況が生じた背景としてはバ未然命令条件構文が前件に非状態的な述語を含む場合には、その意味に関して曖昧性が存在するのに対してタラ命令条件構文ではそのような曖昧性は存在しておらず、そのような曖昧性回避のために、非状態述語を含むものについてはタラ命令条件構文が優先して選択されたという提案を行った。また、その結果として、現代日本語のバ命令条件構文における分布制約が形成されたことを提案した。

#### (4) バ已然命令条件構文の変化と制約形成

現代日本語で用いられるバ命令条件構文はバ已然命令条件構文に対応し、バ已然条件構文が後件に命令形述語を含むようになった過程を説明する必要がある。本研究では、この変化は書き言葉が話し言葉に近い形で表されるようになった言文一致の影響を受けている可能性を提示し、その結果、バ未然命令条件構文と同様に後件で命令を示す機能拡張が生じたと論じた。

以上を踏まえ、本研究では現代日本語におけるバ命令条件構文の前件述語に関する制約は、他構文との機能的な役割分化、また、言語外的な要因を受けて生じた変化であり、この変化は命令条件構文を含む条件構文のネットワークの再構成を反映しているということを提案した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 瀬戸 義隆	4. 巻 2021
2. 論文標題 現代日本語条件文の条件節の分布にもとづく分類	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト	6. 最初と最後の頁 11～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/88337	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 瀬戸 義隆、セト ヨシタカ	4. 巻 2020
2. 論文標題 if+will条件文における形式・意味機能に関する考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト	6. 最初と最後の頁 21～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/84981	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Seto Yoshitaka	4. 巻 5
2. 論文標題 Factors in the Choice of BA and TARA Conditionals in Modern Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト（2019）	6. 最初と最後の頁 81-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/76983	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 SETO Yoshitaka	4. 巻 27
2. 論文標題 Constructional Status of Mizen and Izen Conditionals in Late Middle Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 SETO Yoshitaka	4. 巻 14
2. 論文標題 What Makes Mizen and Izen Conditionals Distinct?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2018	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/72791	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 SETO Yoshitaka
2. 発表標題 Constructional Status of Mizen and Izen Conditionals in Late Middle Japanese
3. 学会等名 The 27th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------